



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 35

“患者のコーチ”たるべき薬剤師のあり方とは

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

薬剤師が真に“患者のコーチ”なら バイタルサイン等は当然身につけておくべきツール

患者さんが、疾病の治癒や退院、また、高齢者では人生の終わりというそれぞれのゴールに向かって走っているランナーとすれば、医師はやはりコーチとしての役割を担っていると言えます。薬剤師も、OTC医薬品や漢方薬をメインに扱っていた「薬局 1.0」では、やはりコーチのように「その後、どうですか？」ということを行っていましたし、今も、それは同じだと思います。

しかし、こと「処方せん調剤」というカテゴリーの中では、患者さんというランナーからは、薬剤師が給水ポイントのスタッフのように見えているのではないかということをお話しました。このコーチか、給水ポイントのスタッフか、という観点で見れば、薬剤師のまわりで起こっていることや思いが浮き彫りになってくるように思います（表）。

コーチであれば、走っているランナーの状態を把握し、また、今までのアドバイスや練習がどの程度効果を発揮しているかを見るためにも、状態を知ることが必要です。医療、とくに薬物治療においては、血圧や脈拍、体温や呼吸音などに影響を与える薬物を調剤する薬剤師も、当然ながらそれらの状態がどのように変わっているのかを知らなくてはなりません。本連載のテーマであるバイタルサインやフィジカルアセスメントというものは、時と場合によっては、薬学教育6年制への移行によって新たに身につけなければならない手技や概念のように捉えられることがあります。しか

■表

| | コーチ | 給水ポイントのスタッフ |
|----------|---------|-------------|
| ランナーの状態 | 理解している | 理解していない |
| ランナーとの併走 | する | しない |
| 仕事の目的 | ゴールすること | 上手に手渡すこと |
| 優勝祝賀会 | 出席できる | 呼ばれない |
| 責任 | ある | ない |

©Kenji Hazama, M.D., Ph.D.

しそうではなく、薬剤師はコーチとして当然身につけておくべきツールや知識であると腑に落ちておくことが重要だと思います。

薬剤師のあり方を考える上で問われる “責任をとる覚悟”の有無

ランナーと併走するかどうかということも、コーチと給水スタッフの違いです。夜間の問い合わせへの対応に当初は戸惑った薬剤師さんも少なくなかったと思いますが、患者さんと併走しているのであれば、むしろこちらから声をかけることが必要な場合もあるでしょう。「かかりつけ」というのは、本来はまさに「併走している」ということだと思います。

また、仕事の目的もコーチと給水スタッフでは異なります。前者の目的は、ランナーができるだけ良いタイムやコンディションでゴールすることですが、後者の目的は、早く正確に準備して、落とさないように上手にドリンクや水を渡してあげることです。この差は、仕事のあり方を根幹から見直さなくてはならないほど大きな違いだと思います。

さらに、もしランナーが優勝したら、コーチは必ずその祝賀会に出席し、何らかのコメントを求められるでしょう。しかし、給水スタッフにはそのような機会はないでしょうし、ひょっとすると優勝したかどうかもわからないかも知れません。

その一方で、もしランナーが転んでしまったり棄権したりしたときには、コーチは何らかの責任をとらなければなりません。しかし、給水スタッフの場合には、コーチの指示通りのドリンクを準備して上手に手渡ししていれば、ランナーの転倒や棄権について直接的な責任は問われません。これは、場合によっては「気楽な仕事」と考えることもできます。この責任を問われるか、問われないか、また、責任をとる覚悟はあるか、ないかということが、これからの薬剤師のあり方を考える上で、極めて重要ではないかと思っています。